

二人だけの島



畑山博

だけの島

畑山 博



講談社

ふたり
二人だけの島 しま

一九八一年八月二八日 第一刷発行

著者——畑山 博
はたやま ひろし

© Hatayama Hiroshi 1981 Printed in Japan

発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一—三—三 郵便番号二三 電話東京三—六五—二二 振替東京八一—五三〇
印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——一二〇〇円

落丁本・乱丁本は小杜書籍製作部宛にお送りください。

送料小杜負担にてお取替えいたします。

目次

序章	5
第二章	53
第三章	143
第四章	189
第五章	213
あとがき	302

二人だけの島

題字・山岸義明
装帧・司修

序 章

「はたちになった日は、一人で泣いたんよ」

少しまぐれた上唇の奥で、一度言葉を途切れさせながら、塩沢菜苗^{ななえ}は言った。

「その日、わたしは、いつものように、夜九時半にアパートへ帰ったの。そうしていつものように一人ぼっちで晩御飯を作って食べて、それから一人で記念写真を撮った……」

「……………」

「外は、雨だったわ。わたしは、ワインの小びんを一本だけ飲んで、本棚からカメラを出して、こたつ盤にのせて、自動シャッター押して、急いで壁のところにしゃがんで、ポーズをとった……」

彫りの深い顔だちなのに目が細く、その目が決してぼくを直視しない。

「……憶えているわ。去年の誕生日にもそうだった……」

「……………」

「でも、わたしは、そのフィルムを、まだ写真機から抜いてないんよ。フィルムは、まだあの冷たい小さい鉄の牢屋の中にある……来年の分も、さらねんの分も……」

彼女は、元の空色がすっかりかすれてしまったジーンズをはき、同じデニムの半袖上着を、わざ

と襟を立て、その中に髪の裾を押しこんでいた。

皮膚は少し陽に当たらなすぎるのか、食パンみたいな感じだったけれど、小鼻の脇に小さなきびがあった。

そんな女の子だったから、ぼくは彼女を連れて、あんな当てのない貨物列車の旅に出かけてみようと思いたったのかもしれない——。

その日、ぼくたちは、新宿紀伊国屋書店の売り場奥にある狭い喫茶室にいた。

周囲の濃いたばこの煙と、ぼくらを威圧するような人びとの話し声から、ぼくたちだけの臆病な会話を守るために、互いにテーブルの上に身を乗り出すようにしていた。

塩沢菜苗とは、それが初めてではなかった。御茶の水にあるS予備校の同じ国立受験午前組の受講生として、何度か隣り合った椅子に腰かけたこともあった。

でも、彼女の視線やしぐさには、いつも、ほんとうは隣に誰も来て欲しくないというふうなところがあった。

両脇を机の上に突きながら右手の指だけ動かして髪をかき上げるしぐさも、書き損じたノートの文字を波形にエンピツで消すしぐさも、他の女子学生たちにくらべて何か物憂げだった。

それだから逆にいつも目立つ存在だったとも言える。服装もいつもデニムの上下だけだったし、ごくひかえ目なウェーブのついた髪型しかしてこなかった。長身でもなかったし、講義の途中で講師に質問されても、ほとんど答えることも出来なかった。つまり、決してクラスの中心的存在になどなり得ないようなキャラクターなのだ。

それなのに、どうしてか、ブラックホールみたいに気になるのだ。

ぼくたち男子学生だけの会話の中で話題にされる率は、いつも彼女が、他の女子学生たちにくらべて圧倒的に多かった。

といつても、直接デートしたことがある者はいないのだから、ストレートな話題として出てくるのではない。

たとえば新しい英語の格言などがテスト文の中に出てくることがある。そして正解と自分の出した解答の間にあるずれを、どうしてもこちらの敗北とは納得しきれないような場合がある。するとそんなとききつとぼくらは、「塩沢菜苗はどう書いたのだろう」というふうに話題を持ってゆく。そこで誰かがしゃれた落ちのある冗談でもとぼすことが出来れば、それで何となく納得出来たような気になれるわけだ。

ぼくたちはみんな、表面の陽気な饒舌さの裏で、自分たちの時間が砂のように粒々になって剥落してゆくことを怖れていた。

ぼくが比較的良好に話した連中というのは、みなぼくと同じ二浪組だった。二年という年月は嫌な長さだ。先に大学に合格していった連中と自分たちとの差をこんなに大きく開かせておきながら、しかもなお未だ先行者たちの後姿を射程内に収めているかもしれないなどという錯覚も可能なのだ。

むしろそんな錯覚は、ごくたまに模擬の点が破格によかったときとか、陽気でサンチョ・パンサ的な講師が就職試験傾向の微妙な変化の様子を話してくれたりした後の束の間の酩酊みたいなものでしかないのだけれど。

国立受験の午前組だけでも八千人の学生たちがいた。とうてい切符を買いえる順位にはないものにもかも並ばずにいられないめまいにも似た疲労感。それでなくともふだんから風通しの悪かったぼ

くの心の扉が、さらに乾いて目ばりでもされているみたい息苦しい。

学生たちは、みな争っていい席を取ろうとする。しゃにむに教室の前の席に、しがみつくことで何かが奪取出来るとも言いたげに、時刻になると血眼になって廊下を走る。ある時期から、その流れの中に混じることにはぼくは疲れていた。どうという理由はなかった。身体のコの方が重湯のようになつて溶け出してゆく。そんな感じだった。

各教室数百人ずつの学生たちの席取り競争の渦から取り残されて、いつもぼくは後方の空いた椅子のどこかにぼつんと坐るようになっていた。と、そこへある日から一人の女子学生が、同じようにして少しすねた目を上目遣いに黒板の方に走らせながら坐るようになった。

でもぼくたちは、たまに何かの拍子に目が合うことがあつても、敵意に近いような眼差ししか交し合えなかった。

七月に入つて、ぼくはまた田端の家が嫌になつて、町田に借りているプレハブアパートの三畳間へ戻つた。

別に父や母といさかいがあつたわけではなかった。ただときおりたまらなくなるのだ。台所の茶碗の音や、少し重くて開けたてのとき柱にこすれる玄関のドア。三人の家族がまるで別々の時間を暮らしているように各部屋ばらばらに進んだり遅れたりしている時計の音。二階にある応接室のコの字形の欄間。その上にもう別に世帯を持っている兄たちや姉たちやその係類までの引き伸ばし写真が、額に入れてびっしりと飾つてある。みな結婚式や入学式の写真ばかりでとりすましているのだが、てんでにばらばらな方向を向いている。おまけにカラーを白黒にして引き伸ばしているものだから、ぼやけて死人の写真みたいに見えてしまうものがある。そんな家の中で息をしていることがとつぜんたまらなく不安になつて、ぼくは飛び出してくる。

町田駅の国鉄駅前からバスに乗って五分。中町に一万円で借りてステレオと飯ごうなど山登り道具とわずかな受験道具だけ置いて閉じこもり出したのは、S校へ行くようになった最初の年からだった。

塩沢菜苗とときどき教室で顔を合わせるようになって三ヶ月目。七月に入ってすぐ。日曜日だった。ぼくは私鉄の電車を降り、大丸町田店の展望食堂で昼食を食べ、それからジ・ホルナの四階にある有隣堂へ時刻表を買いに寄った。

貨物列車時刻表の新版が最近出て、ごく少数だけれど市販されているという噂を、初めぼくは、鉄道ファン向けのグラフ雑誌の記事で知った。ぜひそれを手に入れたかった。そう思って、幾つかの書店を覗いてみたのだけれど、見つからなかった。

エスカレーターを三度上って明かるいフロアに出たとたん、とつぜん彼女がそこの新刊書売り場にくらだちたのである。

一瞬ぼくは、自分がいつの間にか御茶の水の校舎の中にも迷いこんだのかと錯覚してしまった。尻ポケットの革の剝がれたジーンズもデニムの半袖上着も髪形の形も菜苗に間違いない。どうしてなのかわからなかった。ぼくはしばらくそのままジーンズのポケットをこすりながら突っ立っていた。

菜苗は両足を組んで、少し身体を前屈みに倒し、ミルク色の光る表紙の本を眺めていた。

菜苗とぼくとの距離は、ほんの二メートルと離れていなかった。でも、斜め後ろ向きの姿勢の彼女には、ぼくの姿は視野の端にも入っていない。

相手が気づくのを待ってやあと言うには、ぼくは、エスカレーターの降り口という妙なところに立ちどまってしまっていた。それで、ぼくは、近づいて、いきなり後からぼんと肩をたたく方を選

んだのだ。

「二十一世紀には、この本たちみんな読めなくなるって……」

ぼくは言った。菜苗は身を引くようにして振り返った。

「星飼って言う。ぼく、教室で、ほら、ときどき一緒」

「知ってるわ。そんなこと」

菜苗は言った。

「でも、忘れてるかと思って」

ぼくは言った。

考えてみるとそれは、前に多少はつき合いがあった者同士の言葉のような感じがする。それだから彼女はちょっと調子を狂わせられたのかもしれない。目の表情の中からふっと警戒の色が引っこんだように見えた。

「家が、こっちなのか？」

返事のかわりに彼女は訊いた。

「そう。中町にアパート借りてるから。もう二年も。君は？」

「わたしも町田」

「ジョルナへはしょっちゅうくるのに」

ぼくは言った。

「わたしは日曜だけしかこれないから」

「ああ……」

ぼくはうなずいてみせた。

「それで、町田はどっち？」

「近く」

「そう」

またぼくは言った。

話のつぎ穂がなくなつたまま、じゃあと行って歩き出すのは、いつだってぼくには不安で出来ないことだった。それだから、あんなことを言い出してしまったのかもしれない。

「時刻表買いにきたんだ。貨物列車だけの時刻表。刷り部数がとっても少なくて、なかなか手に入らないんだ……君は、どこかで見なかったよね」

彼女は首を傾げて、遠くでも見るような目つきをした。

それからぶっきらぼうに言った。

「新しい講座に貨物列車のことが出るの？」

ぼくは軽く肩をすくめてみせた。

「もちろん出ないさ。出たってそんなもの、ぼくらにヤカモツ取れいんだね」

ぼくは言った。今度は彼女の方が、ちょこっと肩をすくめて笑つてみせた。

翌る日の月曜日。十時からの講義の教室でまた彼女に逢つた。彼女はぼくを無視しようとしてあいかわらず視線をそらせ、いつもの一番後の椅子にかけた。が、ぼくは、ブックバンドを揺さぶりながら近づいて行つた。

「ねえ、きのう、あなたが言った、『二十一世紀にはもうこの本たち読めなくなる』って、どういう意味」

彼女の方から言いかけてきた。

「気にしたの？」

「そうじゃないけど……」

彼女は口ごもった。

「USAエコーで読んだんだ。大気汚染やらそれによる湿気の増加が原因らしい。紙が、薬品をたくさん使って作る酸性のパルプ紙になって、寿命が短くなりはじめてるんだって」

「そうすると、つまり、あとは石に書くしか刻印される方法はないっていうこと？」

彼女は言った。

「そう。金属板なんて腐蝕するしね……タイムカプセルって言って派手に話題になって地下に埋められたやつがあったけれども、あれだって金属板の処理の仕方は薬を使った印刷だよ。何世紀かたって掘り出されたときはたぶん読めなくなってるだろうって……」

「……………」

「千年後の人は、一体誰がこんな金属屑を大切そうに埋めたんだろうって思うのかなあ」

ぼくは言った。

彼女はゆっくり髪をかき上げながら窓の外の汚れた街並に目を移した。

「砂漠に憧れてるのは景色ばかりじゃないのねえ……」

顔をまだ窓外に向けたまま、つぶやくように彼女は言った。

教壇の方では、度の強い眼鏡をかけた、このS校の講師陣で一番著書の数が多いのが自慢のKが、甲高い声をあげはじめていた。

明大通りのマクドナルドで昼食を食べてから別れたり、食べなくとも駅まで是一緒に帰ったりするように何となくなつた。彼女はその後銀座でペイのいいアルバイトをしているとかで、いつもせ